

ふるさと再発見！

vol. 12

ほろほろわかやま

FREE



巻頭
特集

黒潮国体 あのと熱気をふたたび

AR

歴史・文化

散策

I♥WAKAYAMA 私の和歌山

想いをカタチに

歌い継がれるご当地ソング 和歌山のわらべうた

美しい海を眺めながら温泉を楽しみ、歴史を探索 しらはまウォーク

美しきロード + おもしろいわしてお国ことば和歌山弁～番外編

『紀州藤白 鈴木屋敷ものがたり』発起人の角谷勝司さん「心柱」を文字で残す



①盛大に行われた開会式。②歓声を上げる子どもたち。③全国から15,000人以上の選手団が参加した。④和歌山市本町付近で実施された歩行者天国。⑤熊野三山、高野山で採火した炬火。⑥県内各地を巡った炬火リレー。写真は打田町（現紀の川市）。

黒潮国体

あの熱気をふたたび

平成27年（2015年）、和歌山では2度目となる第70回国民体育大会「紀の国わかやま国体」が開催される。開催まで2年を切り、膨らむ県民の期待。そのムードに、前回大会の記憶を重ね合わせる人も多いたろう。今をさかのぼること40年以上、和歌山で初めて開催された国体「黒潮国体」の熱気とは――。

昭和46年（1971）10月24日、スタンドを埋め尽くした大観衆が見守る中、紀三井寺運動公園陸上競技場の炬火台に炎が灯され、第26回国民体育大会「黒潮国体（秋季大会）」の幕が開いた。全国から約1万6千人の選手団を迎えた県を挙げての一大イベントは、104万県民あげての英知と努力が実を結んだ祭典だった。

メイン会場の紀三井寺運動公園や、国体道路など、黒潮国体のために多数の施設や道路が整備された。そしてそれらは、全国からの来訪者を迎えた当時の県民の熱気を伝えている。県民総参加で行ったイベントのひとつが、8千人を超えるランナーが参加した「炬火リレー」だ。熊野三山、高野山で採火した炬火は、白浜町からスタートし、14日間かけてメイン会場に届けられた。ランナーは小学生から高齢者まで。県民の国体ムードを充分盛り上げた。

国体100日前を記念し、和歌山市で夕涼み歩行者天国が実施されたのは7月10日。本町付近には約10万人の人があつた。国体開催決定時から、県内では花と緑いっぱい運動や、清潔運動、親切運動が展開されており、県民がいかに国体を心

待ちにしていたかが伺われる。大会期間中には、会場の清掃や競技場の整備で県民ボランティアが活躍。大会を運営する上で、ボランティアの協力はなくてはならないものだった。

また、県外からの選手団の宿泊を受け入れる民泊は、出場者と地元住民が絆を深めるきっかけに。県民の心をこめたおもてなしは好評で、大会終了後には、地元住民と選手が別れを惜しむ場面も多く見られた。

県民の熱い後押しもあり、和歌山県選手団は、男女総合成績1位に与えられる天皇杯を獲得、女子総合成績でも第2位と好成績を収める。選手の大活躍と、黒潮国体のために一丸となった県民の熱気は、今も多くの人々の心に焼き付いている。

和歌山市本町2丁目付近。炬火ランナーに沿道から声援が飛び。



【写真・動画提供】紀の国わかやま国体・紀の国わかやま大会実行委員会

躍動と歓喜、そして絆

県民が一丸となって全国からの来訪者を「おもてなし」した黒潮国体から40年以上、開催まで2年を切った紀の国わかやま国体は、40年前と同じように、多くの県民の期待を集めている。

黒潮国体では、
すぐ盛り上がったんだね！
44年ぶりに和歌山で開催される
紀の国わかやま国体では、それ以上の
盛り上がりになるよう、きいちゃんも
広報活動がんばるワン！



紀の国わかやま国体
紀の国わかやま大会
マスコット

きいちゃん

2015 紀の国 わかやま国体

平成
27年 9月26日^土
▶10月6日^火

正式競技：37競技
特別競技：1競技
公開競技：4競技
デモンストレーションスポーツ：27行事

広く国民の間にスポーツを普及し、スポーツ精神を高揚して国民の健康増進と体力の向上を図り、併せて地方スポーツの振興と地方文化の発展に寄与するとともに、国民生活を明るく豊かにすることを目的としています。



2015 紀の国 わかやま大会

平成
27年 10月24日^土
▶10月26日^月

正式競技：13競技
オープン競技：2競技

障害のある選手が競技等を通じてスポーツの楽しさを体験するとともに、人々が障害に対して理解を深め、障害のある人の社会参加が促進されることを目的としています。



地域ぐるみで選手団を歓迎した。

絆を深めた民泊

黒潮国体では、一般家庭に選手が宿泊する「民泊」が県内各地で実施された。福原さんが受け入れたのは、出身地の福島県選手団だった。

黒潮国体のとき、福島県の選手が私を頼ってきました。「泊めてくれ」と。そこで選手団の民泊を受け入れることにしたんです。結局、その福島に優勝を持っていけることになったんですが、今となってはそれもいい思い出です。

粉河町にあった田中秀樹さん（社会福祉法人一麦会理事長）の実家は、レスリング選手の民泊を受け入れた。

若い人がたくさんやって来て、両親が喜んでいたのを覚えています。十分なおもてなしができたかはわかりませんが、絆が深まったのは確かで、県勢だけでなく、宿泊してくれた選手も応援するようになりました。国体を身近に感じた出来事でしたね。



好評だった民泊、楽しい1コマ。



県民と選手団の間には絆が生まれた。

広がる国体の輪

ふくはら ひろつぐ
【取材協力】福原 広次 氏

自転車競技で五輪出場。
黒潮国体出場を機に福島県から和歌山県に移住した。



出場を機に和歌山に定住

黒潮国体では、県勢の競技力の向上を目的に、国内トップレベルの選手、指導者が招聘された。当時、県選手団として出場した他県出身者のなかには、そのまま和歌山に移り住んだ人も少なくない。福島県出身で、黒潮国体の自転車競技に出場した福原広次さんもそのひとりだ。

東京五輪に出場、続くメキシコ五輪のあとに引退していったので、黒潮国体には指導者として参加するつもりでした。ところが、和歌山に来てみる

と選手で出てくれという話になった。五輪選手だから国体くらい大丈夫だろうと。そして本番、自転車競技は何人か入賞者を出したものの、もうひとつ振るいませんでした。悔しかったのは、自転車競技の総合優勝を福島県に持っていかけたことです。福島は初優勝でした。

温暖な和歌山に驚き

県勢が思ったような成績を残せなかった理由のひとつには、選手ののんびりした性質があったと思います。穏やかな気候で育ったせいか、和歌山の選手は「絶対勝つ」とい

う気迫が薄い。私が育った東北の選手とは違いましたね。

和歌山に来ていちばん驚いたのは、冬に雪が降らないこと。私は那須山系（福島県と栃木県の県境）の麓で育ちましたから、冬は雪に埋もれてしまっんです。だから和歌山の暖かい冬には衝撃を受けました。

当時は何かにつけてまだのんびりした時代で、よく練習に利用した大浦街道は車が少なく、走り込みに最適でした。国体のロードレース用コースは、みかん畑の中を走り抜けるような道でしたよ。

県勢のレベルアップに尽力

黒潮国体のあとも、和歌山県の指導者として30年以上、国体に出場しました。その間、ナショナルチームの監督、コーチも務め、「和歌山に福原あり」と言ってもらえるようになった。これは私の誇りですね。

現在は「スポーツ吹矢」という競技の普及に努めています。紀の国わかやま国体でもデモンストレーションスポーツとして実施されるので、ぜひ多くの人に知ってもらいたいですね。



県営秋葉山県民プールを主会場に実施された水泳競技。



ヨット競技は和歌浦湾で実施。



日置川町立総合運動場（現日浜町立総合運動場）で実施されたテニス競技。



選手は躍動感溢れる姿を見せた。



体操競技の会場となった県立体育館。

歌い継がれる

ご当地ソング

和歌山のわらべうた

いま地方を活動拠点とするご当地アイドルや、地域色をタイトルや歌詞に盛り込んだご当地ソングが注目されている。このような楽曲が人々に愛されるのは今も昔も変わらない。民謡やわらべうたなどは、古くから愛され唄い継がれているご当地ソングだ。



暮らしと共にあった歌

街を歩けばたくさんの音があふれ、私たちの意思とは関係なく勝手に耳に入ってくる。そんな音の洪水のなかでも、平気で過ごせる私たちの日常は、ある意味で悲しい現実かもしれない。テレビやラジオが普及し

ていないころなら、海の波音や川のせせらぎ、木々を揺らす風の音、地面をたたく雨音など、自然の音に耳を傾けて、様々なことに思いを馳せていただろう。人々を取り巻いていたのは自然の音ばかりではない。田植え唄や木挽き唄、酒造り唄など、作業をするとき

には様々な仕事唄が歌われ、民謡として各地で伝えられていた。

子どもたちの世界も同じだ。子守り唄や遊び唄など、その土地に古くから伝えられた歌が口ずさまれていた。人々の暮らしには、いつも歌が一緒にあったのだ。

遊びのなかの

伝承文化

子どもたちは夕暮れまで遊びまわり、色々な「わらべうた」を口ずさんでいた。子守唄、手まり唄、数え唄、しりとり唄、唱え唄（おまじない）など、「わらべうた」は遊びのなかで生



まれ歌い継がれた伝承文化といえる。

また、口伝えされる過程で、地域の生活環境や方言の違い、遊びの種類などの変化を受けやすく、歌詞やメロディに地域差や時代差がでる。同じ歌であっても遊び方が違ったりするのだ。

全国的には、かごめかごめや花いちもんめ、あんながたどこさ、にゅびきりげんまんなどが知られているが、和歌山にも長い時代を経て、人から人へと伝えられてきた歌が数多くある。時代の流れのなかで、その影が薄くなりつつあるが、貴重な文化を見つめ直してみたい。

とんとんお寺の

日高川町にある道成寺は、安珍と清姫の凄惨な物語で全国的にもよく知られている。この安珍清姫伝説は、能をはじめとして歌舞伎や浄瑠璃などさまざまな芸能の題材となり、いわゆる「道成寺物」というジャンルが生まれるほど流行した。演目ごとに話の展開や人物設定が異なるが、現在でも映画やフラメンコに至るまでたくさん作品が生みだされている。和歌山に伝わる「わらべうた」のなかにも、道成寺の安珍清姫伝説は伝えられている。

とんとんお寺の 道成寺
釣鐘下ろいて 身をかくし
安珍清姫 蛇に化けて
七重に巻かれて
ひとまわり ひとまわり



これは小学校の音楽教科書に掲載されていたことがある「手まり唄」だ。県外の人でも、小学校の授業で習って知っているということがある。

1番目の歌詞では安珍清姫伝説が歌われ、続く2番目の歌詞では道成寺の境内の様子が歌われる。メロディはほとんど同じであって、地域によって歌詞の異なるわらべうたのひとつだ。



※このページのAR音源は北川真里菜さんにピアノ演奏していただきました。

根来の子守唄

現在、広く歌われている「ねんねんころりよ おころりよ」で始まる子守唄のルーツは江戸の子守唄とされ、参勤交代や行商の往来によって全国に伝わり、またその土地の文化や風習が歌われるようになったといわれている。

紀北地方で広く伝えられる「根来の子守唄」もそうしたなかのひとつだが、多くの子守唄が子どもを寝かしつける「寝させ歌」や起きた子をあやす「遊ばせ歌」であるのとは異なり、当時の根来の様子を色濃く伝える歌詞が特徴的だ。

ねんね根来の 覚はん山で
としよじ 来いよの 鳩が鳴く
ねんね根来の ようなる鐘は
一里きこえて 二里ひびく



この歌詞は根来寺境内に石碑として残されているもので、覚はん山とは覚鑊上人のひらいた根来寺一帯を差しており、としよじには年寄りの意味もあるが、東照神すなわち徳川家康をあらわし、天正13年（1585）の豊臣秀吉による根来攻めの際、徳川方の援軍を願った歌詞だとする説も伝えられている。

また、同じ根来の子守唄でも別の歌詞では、根来寺のふもと西坂本にある豪家の娘が嫁入りの際、通りかかった池からあらわれた大蛇にさらわれたという伝説を歌ったものもあり、歌と地域の人々とが深く結びついているのがわかる。





②熊野三所神社

熊野の三所（本宮、速玉、那智）を奉斎した古い歴史を持つ社で、境内には「火雨塚古墳（ヒサメヅカコフン）」という紀南を代表する古墳の史跡がある。

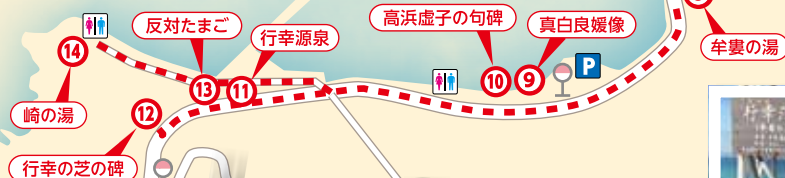


④白良浜

日本の渚百選にも選定された近畿屈指の海水浴場。石英を成分とするサラサラの砂が有名だ。

⑨真白良媛像

有間皇子を慕ってひたすら皇子の帰りを待ったという創作の悲話に出てくる女性の像。白浜でとれるという「ホンガク」ヒガイという貝を抱えている。



⑬反対たまご

温泉街の名物といえばやはり温泉たまご。黄身が固まり、白身が半熟の温泉たまごで「反対たまご」と呼ばれ、観光客に人気だ。

⑫行幸の芝の碑

行幸の芝とは、天皇が湯治のために滞在する行宮（あんぐう）跡地が畑となった場所。

①本覚寺

白浜で最も古いお寺で、別名「貝寺」と呼ばれる。多くの貝を収集し、展示している。



⑤中村憲吉の歌碑

近代日本の代表的な歌人（1889～1934）。アララギ派の有力な歌人として活躍した。昭和2年に白浜に来て詠んだ歌のひとつが歌碑になっている。



⑦有間皇子之碑

謀反の疑いで捕らえられ、処刑された悲劇の皇子。彼は伯母の斉明天皇に牟婁の湯に行くことを勧めた。



⑩高浜虚子の句碑

明治～昭和期の俳人、小説家（1874～1959）。昭和8年熊野巡遊の際に白浜を詠んだ句の句碑が白良浜を見渡す海辺に建てられている。

⑪行幸源泉

歴代の天皇や有間皇子も入ったと言われ、1400年前から続く最も歴史ある源泉。湧出量も豊かでここから外湯の「崎の湯」「牟婁の湯」へ供給している。



ぶらり湯



③白良湯

白良浜の目の前にある温泉で、1階は木造りの休憩所があり、お風呂のあとゆったりとくつろげるスペースになっている。【定休日：木曜】



⑥しらすな

海水浴場に隣接した温泉施設で、冬は「足湯」としてベンチも用意され、夏は水着着用で入る混浴露天風呂になる。【定休日：月曜（7/1～9/30は無休）】



⑧牟婁の湯

かつて「日本書紀」や「万葉集」にも登場した歴史を持つ由緒ある温泉。まぶ湯と行幸湯（みゆきゆ）の2つの源泉からお湯をひいている。【定休日：火曜】



⑭崎の湯

目の前に太平洋が広がる開放感あふれる露天風呂の共同浴場。万葉の昔から「湯崎七湯」のひとつといわれ、その風情は古えの姿に近い形を残している。【定休日：水曜】



美しい海を眺めながら温泉を楽しみ、歴史を探る

しらはまウォーク

飛鳥・奈良朝の時代から多くの天皇・宮人が訪れ、海岸美の名勝と、古くから愛される温泉街の歴史をひも解きながら歩く…

まずは、白浜では最古の寺「**本覚寺**」をめざす。最寄りのバス停・瀬戸の浦を降りるとすぐに見えてくる。紀州徳川家の崇敬があつく、付近でとれた珍しい貝殻を藩主に献上する白浜の慣例に従い、多くの貝殻を集めたことから、別名「**貝寺**」と呼ばれている。円月島を右に眺めながら進むと、「**熊野三所神社**」の鳥居が右側に見えてくる。権現崎の付け根辺りに鎮座し、熊野三山の別宮的存在である。社叢（**神社の森**）として、県の天然記念物に指定されている。さらに進むと鳥居があり、その向こうには「**白良浜**」が一望できる。

だ。道路を渡ってすぐ右手には、白浜を舞台に、悲劇の皇子として日本書紀に登場し、白浜温泉の名を広く世に知らしめた「**有間皇子之碑**」が顕彰されている。続いて、風格ある佇まいの「**牟婁の湯**」へと進む。日本書紀にも牟婁の湯で登場し、磯湯・行幸湯の2種類の源泉を楽しむことができる歴史ある外湯だ。さらに歩くと「**真白良媛像**」・「**高浜虚子の句碑**」がある。坂道を上ると「**行幸源泉**」の鉄柱がそびえ、辺りには硫黄の匂いが漂う。白浜最古の源泉で、天皇が都を離れて外出する時にいう言葉「**行幸**」に由来する。温泉風情を楽しみながら、さらに進むと「**行幸の芝の碑**」がある。

少し戻って温泉街名物の「**反対たまご**」のお店で温泉玉子を頂く。そして今回の最終地点「**崎の湯**」に着着。太平洋と一体となった気分を味わえるこの露天風呂は、一三五〇年の歴史を持ち、かつて天皇・貴族らが好んで入浴したと伝えられている。

みんなに伝えたい、誰かに知ってもらいたい。胸に秘めた想いは誰にでもあるもの。

そんな思いをカタチにするのが本づくりです。

あなたのそばにいる和歌山の人が書いた和歌山の本、その1文字1文字に込められた想いを紹介します。

「心柱」を文字で残す

『紀州藤白 鈴木屋敷ものがたり』発起人の角谷勝司さん

日本全国に200万人いるといわれる「鈴木さん」。そのルーツが海南市の藤白神社敷地内にある鈴木屋敷だ。昭和の初頭まで鈴木宗家が住んでいたこの屋敷は、その後、無人となり荒廃した。しかし、近年は「鈴木屋敷を守る会」を中心に保存活動が活発化している。そんななか、海南市で行われた第7回全国鈴木サミットに合わせ、同会が『紀州藤白 鈴木屋敷ものがたり』を発行。発起人の角谷勝司さん（株式会社サンコー相談役）には、同書にかける熱い「想い」があった。

海南市は鈴木姓の発祥の町ですが、現在の海南市には40戸ほどしかありません。そのため鈴木姓発祥の町であることが町の誇りとなっていなかった。鈴木屋敷も藤白神社の宮司が守ってくれていましたが、ひとりの力では地元の総意とはいえませんよね。その状況をなんとかしたいと宮司や鈴木会の方々に相談し、昨年2月「鈴木屋敷を育てる会」を結成しました。そして第6回で中断していた鈴木サミットを地元海南市でやろうと決めたのです。

鈴木サミットを鈴木宗家の海南市でやると決めたからには盛大にやりたい。県をあげておもてなしするべく、知事、市長、代議士もまきこみました。熱意をもって自筆の手紙を送り、日本一有名な鈴木さ



かくたに まさし
【取材協力】角谷 勝司 氏

株式会社サンコー創業者。現相談役。著書に『ひたむきに生きる』『自分を育てる知恵』など。



紀州藤白 鈴木屋敷を育てる会発行
A5判／76頁
印刷製本・(株)ウイング
古代熊野から続く鈴木姓の成り立ちを軸に、和歌山の歴史・風土が
つづられている。

んであるスズキ自動車の鈴木会長にきていただくことに成功。せっかく全国の鈴木さんにきていただくので、何かお土産を、ということでできたのが、『鈴木屋敷ものがたり』です。

この本は小学校高学年の子どもから読めるようにしてもらいました。サミット以外に、海南市の小中学校にも無料配布してもらいましたよ。すぐ浸透するということはないでしょうが、常に話題をつくっていききたいですね。藤白神社で配布していますが、県外の方に好評で、よく持ち帰ってくれているようです。

これまでも何冊かの自費出版本を発行してきた角谷さん。その原動力たる「想い」をうかがった。

私は頑張ることでできる心のよりどころを「心柱」と呼んでいます。この無形の心の財産を文字を通して残していきたいと思っています。心柱を綴ることで目に見えるようになった「想い」は、ずっと後世に残っていくと思っています。

地元を応援したい、関わる人々に心柱を残したいと終始、語ってくれた角谷さん。にこやかに、かつ情熱的に語る「人に喜んでもらえるために、死ぬまでお役に立てることをしていきたい」との言葉から、本に込めた信念が伝わってきた。

おもてなしの心で 「お国和歌山弁」 番外編

今回は、この季節に耳にする和歌山弁を編集部でピックアップ。こんなことばがある、あんなことばもあったと、会話が弾んだ。読者のみなさんも、まわりの方々と和歌山弁のおもしろさを再発見してみては？

手袋をはく 手袋をはめる。あなたは「履く派」？
手袋をさす それとも「挿す派」？

はんちゃ 〓どてら（中綿入り半纏）のこと。

きける 〓疲れる。ばてる。

はしかい 〓喉がチクチクとむずがゆい。

きづかない 〓大丈夫。

「きけてないかい？」（疲れていない？）

「かでひいて、のどはしかいんよ。きづかないで。」（風邪をひいて喉が痛いんだ。大丈夫だよ）

がいに・やにこい・ごうらい 〓とても。すごい。

ちつとう・ちったかし・ちよとかい 〓少し。

ひゃこい・ひゃつこい 〓寒い。冷たい。

「けさは、がいにひゃつこいのー。」（今朝は、やけに寒い「冷える」ね。）「ひるにはぬくなって、ちつとうましになるやろ。」（お昼には暖かくなつて少しはましになるよ）



「美しきロード」 by ジョー（編集部）

我がふるさと、和歌山の美しい海岸沿いをバイクで走っていると、ふと思ひ出す。

16、7年前になるだろうか。学生時代に広島県と香川県出身の友人2人とオートバイで紀伊半島をぐるりと1周したことがある。和歌山市を発し、大阪に住んでいる友人たちと合流すると、大仏を見ることなく奈良県を横断し、三重県では松坂牛を食らうこともなくそのまま南下し、和歌山県に入っても文化財などの観光スポットには目もくれず、海岸沿いをひたすら走りぬけた。若さゆえだったのか、今思えば勿体無いツーリングをしてしまったと苦笑する。

そのツーリングの途中で立ち寄ったコンビニで休憩したとき、その近くに住んでいたおばあちゃんが「兄ちゃんら、これ食べなぬ」とくれた蜜柑が甘酸っぱかったこと、ひたすら走り抜けるなかで友人たちが和歌山の海を「きれいだな」とやたら連呼していたことを鮮明に思い出す。今思えば和歌山の良さが少しは伝わっていたかもしれない。

最近はずいぶん、泊りがけのツーリングなんて行けないけど、美しいと褒めてくれた和歌山の海岸沿いをたまにバイクでながす。友人たちよ、和歌山の海は今も最高にきれいで気持ちがいいぞ。

I ♥ WAKAYAMA 私の和歌山



みなさんは「AR」をご存知でしょうか。スマートフォンやタブレット端末のカメラを印刷物にかざし、便利な情報を幅広く受けとることができるサービスがARです。最近では見慣れた「QRコード」と少し似ています。読者のみなさんにも体感してもらいたく、ほうぼわかやまの各記事に関連する簡単な動画を作ってみました。誌面では語りきれないストーリーを動画等でお楽しみ下さい。

※ご利用いただくためには、インターネットへの接続が必要です。※本アプリケーションのご利用は無料です。※アプリケーションのダウンロードにかかる通信費は、お客様のご負担となります。※通信状況によっては動作しない場合がございます。



ほうぼわかやまの
動画がご覧になれます



①お手持ちのスマートフォンやタブレットへ無料アプリケーションの『junaio』をインストールします。



iPhone,iPad,iPod
の方はAppStoreへ▶



②『junaio』を起動し、画面右上の『scan』をタップ（指で画面を軽く1回叩く）します。つづいて画面の枠内に上記のQRコードを読み込みます。



Androidモバイル
の方はPlayストアへ▶



③QRコードを読み込んでから、各記事のARマークがついている写真やイラストへ、カメラをかざしてください。動画や音楽をお楽しみいただけます。

facebook はじめました。

<http://www.facebook.com/houbo.wing>

「いいね」を押すと、ほうぼわかやまの最新情報があなたのタイムラインに届きます！

「クリック！」

いいね！

ほうぼわかやま

検索

育む郷土愛

編集後記

「覚えてる」vs「全然知らない」…と、編集部内でいろんな意見が出たのが今回の国体の特集記事です。読者のみなさんは覚えていらっしゃる方が多いのでしょうか？私はほとんど覚えていません…と若ぶってみました（笑）。ちなみに、記事を書いたのは、黒潮国体を知らない世代です。今回の「ほうぼ」は、新しい挑戦を試みております。AR（AugmentedReality＝拡張現実）です。私も今回、初めて教えて頂きました。誌面に関連する情報を、ネット上の情報とスマホ等で連動させる技術だそうです。「国体」「散策」などの一部の写真に動画を埋め込んでいます。みなさんも体験してみてくださいね。そして、「こんなになったらいいのになあ」というお声をお聞かせ頂けると嬉しいです。もちろん、ARに限らず、ほうぼ全般へのご要望・ご提案も大歓迎です！

そうそう、ほうぼのFacebookページもこの秋より立ち上がっていますので、そちらへ来て下さってうれしいです。お待ちしております。

しかし、デジタルの世界の進化は速いですね。ポチポチついて行きましょう（笑）。

第12号編集長 岡 京子

クイズとアンケートで当たる！

クイズにお答え頂いた方の中から抽選で「紀の国わかやま国体・紀の国わかやま大会」のオリジナルフレーム切手

合計10名様にプレゼント!!

ハガキ
見本

- ① ご住所
- ② お名前
- ③ 年齢
- ④ 性別
- ⑤ クイズの答え
- ⑥ 本誌の入手場所
- ⑦ 本誌のご意見・ご感想

応募要項

1次め切：2014年2月末日（当選人数／5名様）2次め切：2014年3月末日（当選人数／5名様）

■ハガキ：〒640-8464 和歌山市市小路153-1 紀の川ビル2F 株式会社ウイング「ほうぼ・クイズ＆プレゼント係」
■メール：houbo@w-i-n-g.jp ※応募くださいました個人情報、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。

ヒント
本号のどこかに
答えが載っています。

問題 紀の国わかやま国体・紀の国わかやま大会マスコットの名前はなんでしょう？

①わかぱん ②きいちゃん ③きしゅう君

Vol.11の答えは「①飛行機」でした。

官製ハガキまたはメールにて ①ご住所 ②お名前 ③年齢 ④性別 ⑤クイズの答え ⑥本誌の入手場所 ⑦本誌へのご意見・ご感想を必ずご記入の上、下記へふるってご応募ください。



株式会社ウイング／印刷物の企画・デザイン・製造を専門とする会社で、「ほうぼわかやま」の発行や本づくりを通じ、文字による地域文化の振興を目指しています。自費出版のご相談はウイングまで！
[沿革] 創業 1972 年。設立 1981 年。

「ほうぼ・わかやま」発行について

和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で年2回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内の活性化の両立を図ることを目的としています。

詳しくはウェブで検索→ <http://w-i-n-g.jp>

ウイング 和歌山



ほうぼわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。
お問い合わせ先 ☎0120-136-700